

八ヶ岳通信

■ 総合博物館

2020年を盛り上げた天文現象 部分日食/木星・土星の超大接近

令和2年(2020年)は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、苦悶の日々が続きました。そうした中、めずらしい天文現象の話題が明るいニュースとなりました。

6月21日、日本全国で部分日食が見られました。当日は日曜日で、午後4時～6時の観察しやすい時間帯であったことから、当館でも観察会を行いました。



日食観察会の様子

茅野市での欠け始めは、午後4時9分ごろ。直前から雲が現れ、このまま観察できないのではないかと一時は心配されましたが、午後5時ごろ、大きく欠けた太陽がようやく姿を見せました。その後、食が終わる午後6時ごろに再び雲に覆われるまで、十分に楽しむことができ、参加者に笑顔が広がりました。次に茅野市で見られる日食は、2030年6月1日の部分日食(北海道では金環日食)です。



食最大(食分0.479)のころの太陽

また、12月21日には、木星と土星が接近して見える天文現象「会合」が起こりました。公転周期が12年の木星と30年の土星の会合は20年に一度起こります。しかも見た目の間隔(離角)が0.1度以下になる接近は約400年ぶりのことで『超大接近』と大変話題になりました。日が暮れた空に輝く2惑星は肉眼でもすぐに見つけることができました。その2つが分かれて見えた(肉眼で分離できた)かどうかは視力次第。皆さんはいかがでしたか。茅野市北部生涯学習センター(北部中学校)天体ドームの望遠鏡では、木星の縞模様や衛星、土星のリングも観察できました。次の木星・土星超大接近は、2080年3月15日です。

木星と土星が望遠鏡の同一視野に入るほどの接近は非常にめずらしい。
茅野市北部生涯学習センターの15センチ屈折望遠鏡で撮影。

他にも、7月に肉眼等級となったネオワイズ彗星、10月の火星最接近、毎年12月中旬に極大を迎えるふたご座流星群など、いずれも天気に恵まれました。2021年は5月26日に皆既月食、11月19日に部分月食がありますので見逃せません。しかし特別な天文現象のときだけでなく、星空はいつもそこに広がっています。ただ星空を見上げるだけで、宇宙を身近に感じられることでしょうか。博物館が毎月開催している「星空観望会」、日中の青空の中に光る星を観察できる「昼間の星を見る会」、博物館所蔵の大型望遠鏡を使った「博物館で星空観察会」などの機会もご活用ください。

茅野市文化芸術推進事業

茅野市内のミュージアムは、その文化資源を活用しながらそれぞれに活発な運営をしています。個別の活動となりがちです。こうした状況を解決するため、ミュージアムと関係機関の連携強化により、文化資源を効果的に活用し、地域の観光振興および地域の活性化に資することを目的とする、茅野市文化芸術推進事業実行委員会が組織されました。3年目となる本年度は、設置者が異なる様々な分野の5館(茅野市尖石縄文考古館、茅野市八ヶ岳総合博物館、茅野市神長官守矢史料館、茅野市美術館、京都芸術大学附属康耀堂美術館)と関係機関(茅野市中央公民館、茅野市市民活動センター「ゆいわーく茅野」、一般社団法人ちの観光まちづくり推進機構、茅野市および茅野市教育委員会の関係部署など)が連携して茅野市文化芸術推進事業を行ない、茅野市の玄関口とも言えるJR茅野駅に隣接する文化複合施設・茅野市民館内にある茅野市美術館を事業展開の事務局館としました。

本年度は、同事業の中で、①2018年度と2019年度に開催した「ちのミュージアム・ピクニック」と「ちのを編む みんなのサロン」のレポート(印刷物とウェブサイト)作成と、②「茅野市美術館を一緒にサポートしませんか+9」をおこないました。

①「ちのミュージアム・ピクニック」&「ちのを編む みんなのサロン」レポート

「ちのミュージアム・ピクニック」は、2018年度と2019年度に各2回、計4回開催。毎回、茅野ならではのテーマを定め、定員20人のマイクロバスで、ミュージアムと、市内の様々なスポットをめぐり、各館学芸員や、一般社団法人ちの観光まちづくり推進機構のガイドが案内をしました。テーマに沿って見直すことで、文化・芸術を育んだ茅野のまちの魅力に気づいていただけたのではないかと思います。「ちのを編む みんなのサロン」は、2018年度と2019年度に各3回、計6回開催。茅野市文化芸術推進事業に関わるミュージアムや関係機関のスタッフが進行役となり、地元の方々が行っている活動を紹介。地元の方々の取り組みを直接うかがい、新たな視点で知り、茅野の魅力を見つけつつ。地域の宝物を再発見する機会となりました。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、2020年度については、「ちのミュージアム・ピクニック」と「ちのを編む みんなのサロン」の開催を見合わせました。そのため、これまでの内容をアーカイブするため、レポートとして印刷物とウェブサイトを作成しました。

<http://www.chinoshiminkan.jp/cm-report/>

ぜひ、ご覧ください。

②茅野市美術館を一緒にサポートしませんか+9

「茅野市美術館を一緒にサポートしませんか」は、茅野市美術館が、文化複合施設・茅野市民館に移転した2005年度から、ほぼ毎年開催しており、通算15回目となる連続講座です。「美術館ってどんなところ?知って体験、興味ひろがる連続講座!」をキャッチフレーズに、美術館の活動やさまざまなアートについて知り、体験する講座となっています。この講座の受講者から毎年、茅野市美術館サポーターが生まれています。本年度は、きほん編を5回、まなぶ編を4回開催しました。

きほん編

- 第1回 美術館の仕事(1月31日)
- 第2回 茅野市美術館サポーターの活動(2月7日)
- 第3回 ネットで繋がる対話による作品鑑賞(2月14日)
- 第4回 他の美術館を知ろう
—和歌山県立近代美術館の活動(2月23日)
- 第5回 美遊com.会を見学しよう(3月7日)

まなぶ編

見るを楽しむ~対話による作品鑑賞~(10月8日、10月9日、2月15日、2月17日) 対象:茅野市立湖東小学校2年生2クラス、永明小学校5年生3クラス

本年度で特徴的だったのが、2月14日の講座でおこなった、ネットを使った「対話による作品鑑賞」です。茅野市美術館企画展示室と茅野市民館マルチホールに受講者が分かれ、それぞれの会場でネットを使った、画面越しの「対話による作品鑑賞」を体験しました。



2月14日 茅野市民館マルチホール



2月15日 永明小学校5-2教室

この講座をふまえ、2月15日と2月17日の講座では、永明小学校5年生の各クラスと茅野市美術館企画展示室をネットをつなぎ、ビデオ通話での「対話による作品鑑賞」をおこないました。コロナ禍で、クラス単位での美術館への来館が難しいと判断したためです。教室の中でも、画面の作品を良くみて、また友達の意見を聞く児童の姿がみられました。ネットを通じた鑑賞の経験が、実際の作品に向きあった時に、より鑑賞を深めることにつながればと思います。

尖石遺跡出土 「X字状把手付深鉢形土器」 78年振りに故郷へ

昭和17年（1942年）9月8日に開かれた国史蹟指定を審議する「文部省史蹟保存地査定部会」に、宮坂英式氏は尖石遺跡から出土した「蛇体把手付深鉢」と「環状筒形土器」を持参し、昭和15年（1940年）から昭和17年までの発掘調査の成果を説明しています。その結果、9月23日に開かれた「史蹟名勝天然記念物調査会総会」で、尖石遺跡の国史蹟「尖石石器時代遺蹟」への指定が決定しました。

その記念すべき日に、尖石遺跡では一つの大形土器が発見されました。翌24日に、宮坂英式氏、小平幸衛氏、小平源治氏の3氏の手によって発掘されたその土器こそ、「X字状把手付深鉢形土器」です。

この土器の上には、長さ60cm、幅15cmぐらいの巨大な角柱状の自然石が乗った状態で発見されました。この大きな土器の発見は、「原型をいささかも破損することなく発掘が出来たもので全国的にも珍しい（以下省略）」（『信濃毎日新聞』1942,12,12）と評されました。



昭和17年(1942年)9月24日
「X字状把手付深鉢形土器」出土時の様子

発掘翌年の3月に、東京帝室博物館（現・東京国立博物館）へ、展示のため搬入されましたが、昭和18年（1943年）ともなれば戦争真っ只中の時代。東京帝室博物館での展示は叶わず、出土地である茅野市へ戻ることはないまま時は流れていきました。一方で、宮坂氏の発掘調査は進捗し、昭和27年（1952年）、尖石石器時代遺跡は国の特別史跡に指定されました。

時は昭和から平成、令和へと移り変わり、昭和17年出土の「X字状把手付深鉢形土器」の所在が令和の時代に明らかとなりました。そして、78年の時を経て、所有者のもとへ返却されることとなった土器は、

令和2年（2020年）11月26日、茅野市尖石縄文考古館へ。同年12月19日より寄託資料として、当館展示室Aで展示がおこなわれています。



茅野市尖石縄文考古館 展示室A
「X字状把手付深鉢形土器」展示風景

「X字状把手付深鉢形土器」は、今から約4500年前、縄文時代中期後半のもので、高さ53.5cm、口径46.3cmの大形土器です。この大形土器は、南北に分かれた2つの縦穴住居群に挟まれた部分で発掘されています。この場所には縦穴住居址が作られず、大きな穴や石を列状に並べたような列石や大型土器が埋設されており、宮坂英式氏はこの場所を「社会的地区」と考え、住居に囲まれた共用広場をもつ縄文時代中期のムラの形を推定しています。



昭和17年(1942年)尖石遺跡出土
「X字状把手付深鉢形土器」(藤瀬雄輔氏撮影)

土器に裝飾された4つの把手は、正面から見るとアルファベットのXのようにも見えることから、「X字状把手付深鉢形土器」と考古学者の間では呼ばれています。

78年ぶりに出土地へ戻ってきた「X字状把手付深鉢形土器」、皆さまにもご覧いただき、縄文時代を、また、宮坂英式氏の思いを感じていただければ幸いです。

戦国武将からの手紙

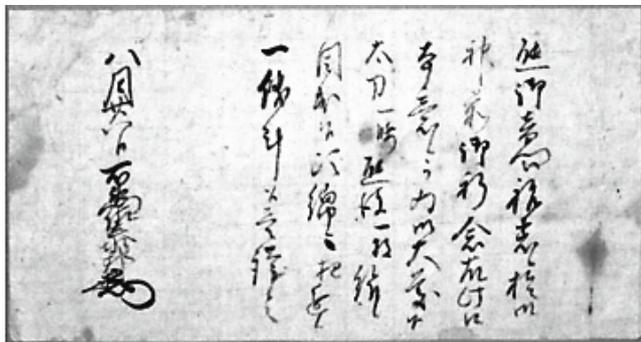
当館では、令和2年(2020年)年8月8日(土)~10月11日(日)に企画展「戦国武将からの手紙」を開催しました。

当館には、武田信玄をはじめとして、信濃国内・関東地方など、多くの戦国武将の書状を収蔵しています。これは、神長官守矢家が諏訪上社の外交を主に行っており、有力な檀家の獲得により、上社の権威を上げるとともに、諏訪氏や武田氏の軍事的な連携の一環として、また、上社の神事が円滑に行われ、神領の保全のためなど、様々な理由から、各地の戦国武将と連絡を取り合っていたことが考えられます。

所蔵する書状の中には、あまり遺されていない希少な武将のものがあります。そのうちの一つをご紹介します。

写真の書状は、藤田泰邦書状です。藤田氏は現在の埼玉県大里郡寄居町藤田を拠点にしていますが、藤田泰邦〔大永2(1522)か~天文24(1555)〕の時に、埼玉県秩父郡長瀨町に天神山城を築き、本拠地としました。泰邦はもとも関東管領山内上杉氏の家臣でしたが、天文15(1546)年の川越城の戦いで北条氏康に降伏し、北条氏の家臣となりました。その後、氏康子の乙千代丸(氏邦)を養子に迎え、家督を譲り用土氏を名乗ったといわれています。

本史料は宛名不明ですが、おそらく神長に贈られたと考えられます。神長が泰邦へ祈禱を行い太刀・熊皮を贈りました。これに対して、泰邦は返礼として綿二把を贈っています。なぜ、諏訪神社側から関東の藤田氏と交渉をもとうとしていたのかは不明です。綿は木綿綿と考えられ、この頃、南関東の特産物だったようです。戦国時代に木綿が日本に伝えられたとされており、早くも関東地方で木綿綿が作られていたことがわかります。泰邦の文書は3点知られていますが、本史料はそのうちの1点です。この書状の年代は天文20(1551)年前後のものと思われる。



(年未詳)8月28日付 藤田泰邦書状

文化財めぐりのすすめ

八ヶ岳に抱かれた茅野市には、恵まれた豊かな自然と地理的な環境をいかした生活・文化が早くから花開き、先人の生きた証である文化財が多数残されました。

令和3年(2021年)2月現在、当市には、国・県・市の指定を受けた文化財が103件あります。これらの文化財を地区別にまとめ、価値や見所を紹介した冊子が『茅野市の文化財』です。



平成29年(2017年)の改訂にあわせ、未指定の文化財をはじめ、地域のシンボルとなっている建造物、地域の歴史や自然が体感できる人気スポットなどを加え、内容を充実させました。

文化財は、地域特有の歴史、自然、風土のもと、先人によって生み育まれた知恵・経験・活動の成果等が形となり、現在まで伝えられてきた地域の宝です。それは、私たちの未来を創造する礎となり、道標になるものです。

「新しい生活様式」を機に、本書を片手に身近にある文化財をめぐり、先人に思いを馳せてみませんか。



ウィズコロナの時代を生きるヒントが見つかるかもしれません。

『茅野市の文化財』
A5版・222ページ

頒布場所 尖石縄文考古館
八ヶ岳総合博物館
神長官守矢史料館
頒布価格 1,500円(税込)

茅野市の博物館・文化財だより 八ヶ岳通信 No.39 発行年月日 令和3年(2021年)3月31日

編集・発行	茅野市八ヶ岳総合博物館	〒391-0213	茅野市豊平 6983 番地	TEL(0266)73-0300
	茅野市美術館	〒391-0002	茅野市塚原 1-1-1	TEL(0266)82-8222
	茅野市尖石縄文考古館	〒391-0213	茅野市豊平 4734-132	TEL(0266)76-2270
	茅野市神長官守矢史料館	〒391-0013	茅野市宮川 389 番地の 1	TEL(0266)73-7567
	文化財課文化財係	〒391-0213	茅野市豊平 4734-132	TEL(0266)76-2386